はじめに ～子どもたちの今を見つめる～

今年、子どもたちと校区に出向き、地域の人や自然、そして町の歴史にふれた。商店街を歩きながら、地域の方と言葉を交わした。「昔は夕方なんか子どもの遊ぶ声が賑やかでなぁ…。子どもの名前もほとんどわかったんやけど、今はなぁ…」学校とともに年月を重ねてこられた地域の方の声。地域から子どもの声が消えかけている。地域から子どもの顔が見えなくなっている。

現代社会の光と影が、私たちの街の子どもたちにも大きくのしかかっている。IT機器の発達による遊びの変化や習い事の増加など、児童と地域社会とのつながりを希薄化させている。また、少子化が進んだ結果、近隣に住む友だちが少なくなり、地域に出かけ自由に遊ぶことが難しくなっている。

さらに、ここ数年加速度的に増え学校統廃合①の影響を受け、バス通学を余儀なくされる児童が増え、登下校中にふれたヒト・モノ・コトに出会う場を失い、子どもたちは地域社会との接点をうすわれるようになっている。

今、子どもたちは学校という点と家庭という点を線でつないだような生活

①文部科学省は「家庭及び地域社会における子どもの社会性育成機能の低下や少子化の進展が長中期的に継続することが見込まれる等を背景として、学校の規模化に伴う教育上の諸問題がこれまで以上に顕著化することが懸念される」とし、公立小学校・中学校の適正規模・適正配置に関する手引きの策定について、通知（2015年1月）を出している。実現市では、2009年に学校規模適正化推進計画を策定し、学校規模適正化で学校の統廃合を進め、2012年3月に20校あった小学校は、2016年4月には12校に減少している。本校は、実現市の実現する学校規模適正化推進計画の第1期の対象校区となり、2012年4月に町内の3小学校を統合して新設された学校である。
の中にいる。子どもたちは、何者かによって引きかれた線の上で、生活の基盤となる社会との接点を失い、地域の生活者としての視点を欠如させ始めてい る。

私は時間を見つけては、子どもたちの生活の場である地域へ出かける。地域に出かけるときも、その地域のモノやコトの出来事が、そのモノやコトをどう考え、それらに思いを寄せるヒトに必ず行きあたり。先日、通勤中に「つちのこホール」という大きな看板を見かけた。「ツチノコ!?あのツチノコだろうか」と、私の頭は「？」でいっぱいになった。さらに、地域の方が管理されているであろう花畑に、「談笑するかかし」が10体以上飾っており、今も動き出そうなるその姿にとても驚かされた。

子どもたちは自分たちの住む街に、こんなおもしろいモノやコトがあることを知っているのだろうか…。もしかすると、地域のおもしろさは知っているのかもしれない。ただ、まだ見ぬ世界へ足を踏み入れる時間と一緒に冒険の旅に出る友だちがいないだけなのです。

私たちの目の前にいる子どもたちは、こんな魅力溢れる場所に足を踏み入れないまま大人になっている。子どもの目線でしか見ることができないモノやコトがきっと私にはある。子どもたちとともに地域へ出かけ、地域の魅力に胸を躍らせたい。まだ見ぬ冒険の世界へ旅立ちたい。千種の人も地域も自然を全て上げ、千種の子どもたちを育てていく取り組みを積み上げていくか。

以下に、千種の子ども達とともにつくりあげた総合学習の実践を紹介する。

1 総合的な学習の時間（小学3年生）の実践事例

（1）単元名
地域と子どもをつなぐ総合学習 — すごいぞ千種！おらジビエ探偵団 —

（2）単元について
本校の地域学習のテーマは「もっと知ろうちくさのことをもっとより合おうちくさの人と」である。他の学年同様、3年生においても総合的な学習の時間の核となる単元として地域学習を進めている。本学級の児童は1学期に、「海と山の交流会2018」で、自分
たちは住んでいる街のよさについて調べ、姫路市立坊勢小学校との交流会でお互いの地域のよさを発表し合った。交流を通じて、児童は自分の街のよさを「自然豊かで森や川からさまざまな恵みを受けている」とまとめた。また、活動後、児童の多くが千種の自然環境に関心をもち、特に森の生き物についてくわしく知りたいと話していた。そこで2学期は、千種の森に焦点をあてながら、森の生き物を軸に据え活動を進めることにした。

近隣を森に囲まれた千種町に住む児童たちは、日常生活の中で森に住む生き物に出会う機会が多い。また、給食や家庭では千種の森で採れた生き物の料理が出されることもある。児童は自分たちにとって身近な「千種の森に住む生き物」との出会いを通して、自分たちの住む地域をより身近に感じることで、地域への視野を広げるのではないかと考えた。

（3）活動の記録（付表1（p.174））

1）千種の森には珍獣が！？

まず、千種の森の生き物をテーマに児童が思い思いのイメージマップを作った（写真1）。ある児童の描いたイメージマップにはナマケモノやツチノコまで登場していた。また、2メートルくらいのオオサンショウウオが防火用水の中にいるという児童もいた。友だちに「そんな生き物は千種にはおらんよ。」と言われても、2人の児童は頑として譲らない。

児童たちの気持ちが想像以上に盛り上がっていたので、結論を急がず自分たちで調べることをアドバイスした。児童たちが調査の方法として思いついたのは「困った時は、だれかに助けもらう。」ということだった。そこで、児童と地域との接点をもたせるために、千種の自然に詳しい講師を探すことに活動をスタートさせた。後から気がついたのが、本学級の子どもたちは手助けをもらおうのが本当に上手だ。

2）寄り道うろうろ、回り道ふらふら

本校の職員に尋ねれば、講師は簡単に見つかったかもしれない。しかし、手間や時間
をかけても、児童とともに一歩一歩学び創造していく過程を大切にしたいと思った。そこで私は「良い人がなかなか見つからないんや。困ったなぁ。誰かおらんかなぁ。」と児童に日々つぶやいていた。最初のうちは私のつぶやきに反応をしなかった児童たちだったが、講師探しが進んでいないことをつぶつぶとつぶやく私を見て「しかもしら先生は当てにならないかもしれない」と思ったようで、児童たちの方がも、講師探しをはじめた。

昨今の教育改革で教育現場にも成果主義の波が押し寄せている。PDCAのサイクルで目標管理を進め、成果の数値化を進める現在の学校には、児童とともに寄り道や回り道をする時間はほとんど許されていない。本来学校は、児童の歩調に合わせながら、時に歩みを止め、悩みや失敗を共有しながら、子どもの「やりたい」をかなえる場ではないだろうか。講師探しを、児童と悩みや失敗を共有する絶好の機会と捉え、児童の動きを気長に待つことにした。

しかし、児童の力借りてもなかなか講師は見つからない。そんな時、クラスの爬虫類博士のSさん（以下Sさん）が「同じ自治会に住む僕の昆虫師ですか。」と申し出てくれた。そこで、Sさんを窓口に地域おこし協力隊Iさん（以下Iさん）に講師をお願いした。Iさんは打ち合わせで、昆虫などの生き物に直接ふれながら交流することを提案してくださった。また、これまで千種の森の中で撮った写真などを資料として持参してくださることになった。学校にこのように前向きに関わっていただけることにとても感謝し、また、非常にありがたくも感じた。

3）千種の森にオオサンショウウオ!?（Iさんとの交流）

Iさんとの交流で児童は、千種の森に特別天然記念物のオオサンショウウオが住んでいることを知り、自分たちの町に貴重な生物が生息していることにとても驚き、数日間はオオサンショウウオの話題で教室がちりきりとなった。休み時間には紙を丸めてオオサンショウウオの模型を作る数人のグループができ、あっという間に教室中がオオサンショウウオの模型でいっぱいになった。「オオサンショウウオはいる。」と謳らなかったSさんは、数日間とても自慢であった。たぬきは見なくてはならないが、あなぐまは油が甘くておいしいという話にも大きく反応し、あなぐまを食べたことがあるという。

2）Iさん（地域おこし協力隊）千種町地域のための子供小学校を活動拠点として、地域での地域活性化のために地域住民と連携して様々な活動を企画・運営している地域おこし協力隊の一員。
先生に調理方法や味を興味深く聞いていた。

また、I さんが特産したアカネズミの巣（写真2）に指を突っ込み、初めての感覚に歓声を上げたり、希少種のカエルが入っている虫かご（写真3）を興味深くして真下から観き込む姿もあった。

児童の日記には「千種に特別天然記念物が本当にいると聞いて、誰かに自慢した気分になった」「おもしろくてツチノコとナマケモノのことを聞くのを忘れてしまい」などの記述があり、I さんとの交流をとても楽しんだことがうかがえた。

4）ツチノコかジビエか･･･はたまたオオサンショウウオか！？

I さんとの交流で「千種の生き物」という視点で整理し、どんな生き物をテーマにして活動を進めるか話し合った。I さんとの交流で児童が最も興味を示したのは、オオサンショウウオであった。私は、オオサンショウウオをテーマにしたいと考える児童が多いと思っていたのが、結果はツチノコ 1 人、ジビエ 14 人だった。残念ながらナマケモノは上がってこなかった。以下、ボックス内の文は、児童のワークシートからの引用である。

【ツチノコにした理由】
・合併前、千種町ではツチノコの捕獲に懸賞金 2 億円をかけ、町おこしをしていたので、千種にはツチノコが絶対にいる。ツチノコに会いたい。そして、2 億円もらいたい。2 億円を 15 人で分けると･･･。

【ジビエにした理由】
・ジビエを自分で捕まえて食べたい。・シカやイノシシに乗りたい。

ツチノコは少数派だったが、夢とロマンが詰まっていて、とてもおもしろいテーマで、妖怪好きの 3 年生にはぴったりだ。ジビエは、子どもたちの生活に密着した生き物なので、調べる価打ちはあると感じた。「学校でジビエを料理して食べても大丈夫だろうか。」
と、一時の不安もよぎる。そんな私の心配をよそに、話し合いは「せっかくだから両方やろうよ。」という意見にまとまった。2つでもできる！？と私は、心の中でつぶやいた…。

5）あきらめきれない2億円

児童は、自分たちをツチノコ探偵団と名乗り、活動を始めるようになった。まず、ツチノコについての情報を集めるために、図書館や市民局での資料探し、地域の方へのインタビューをした。しかし、自分たちの欲しい情報がなかなか見つからない。苦労してみんなで集めた情報も「日本酒が好きで、いびきをかいて寝る。」「メートルジャンプする。」といったような、うわさの城を出ない、怪しいもののばかりだった。児童たちは、ツチノコ調査を進める中で、「ツチノコはたぶんいない。2億円はあきらめよう。」という答えを出し、残念ながら2週間ほどでツチノコ探偵団は早々に解散することになった。

2週間ほどの短い間だったが、児童たちは集めてくるツチノコ情報に驚いたり、その怪しさに疑いを抱いたりしながら、子どもたちとツチノコという共通の話題でわくわくドキドキしたり、がっくりと肩を落としたりする楽しい日々を過ごすことができた。

6）ツチノコ探偵団からジビエ探偵団へ

ツチノコ探偵団解散後は、ジビエに焦点をあてて活動を進めた。ツチノコ探偵団では、自分たちがやるたたことを整理できていなかったという反省から、ジビエについて知りたいことを体験したいことをみんなで出し合った。また、活動の変更の可能性も十分にある考え、計画には少し余裕をもたせた。

【やったこと】
・ジビエ猟やジビエについての調査する
・ジビエ肉を料理して、ジビエ肉を食べる　・シカやウリボーにさわる

3 「気分を盛り上げるには、服装は大事。」と、ツチノコ探偵団のうわさを聞きつけた日先生が、探検服の帽子と緑のスカーフを全員分賜してくださった。それにより、ジビエ探偵団にも引き継がれた。

4 ある夜、ツチノコ探偵団の部屋は、数人の児童によって遠くに続けられており、その後は3学期の総合的な学習の時間に明らかになるのである。
7）シカは本当に悪い生き物？（Kさんとの交流）

児童の視野を地域に向けのために、地域人材との交流はぜひ取り入れたい活動であった。講師について児童に相談したところ、前回講師を依頼したIさんに知り合いを紹介していただく案が出た。そこで、Iさんにもジビエ探偵団の活動を説明し、友人で講師Kさんを紹介していただいた。Kさんも、ジビエ探偵団の活動に賛同してくださり、非常に熱心に交流内容を考えてくれました。猟で使う狩猟やシカやイタチの毛皮など準備してくださることとなった。

Kさんを講師に招いて、ジビエの生態や獵について学んだ（写真4）。また、Kさんが猟で猟ったシカを殻物として加工した毛皮も見せてくれた（写真5）。Kさんは「動物の命も、みんなの命と同じで、一つしかない大切な命です。猟をする時、命をありがとうという気持ちを忘れることは少ないです。そう感じられなくなったら猟師をやめようと思っています。生き物の命をいただく責任はとても重いです。」と話してくれた。

Kさん言葉は、シカに対して「悪い生き物だから猟で殺しても当然。」というイメージをもっていた児童の心を大きく揺さぶった。

【シカに対するイメージ】

<table>
<thead>
<tr>
<th>流行前</th>
<th>流行後</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>シカは田畑を荒らすから、猟で捕るのは当然だと思う</td>
<td>シカの数が増えすぎるのは困るけど、無駄に殺すことはだめ</td>
</tr>
<tr>
<td>シカは人間の邪魔になる、やっかいな生き物だと思う</td>
<td>シカの命も人間の命も同じくらい大事で、人間のじゃまだからといって、かんたんに殺すのはよくないと</td>
</tr>
</tbody>
</table>

5 Kさんは、猟で必要以上の動物は殺さないことや猟でとった肉は自分で責任を持って食べること、毛皮は殻物や小物にし、新しい命としてつなぐことをポリシーに講師をされている。
8）バスに乗れない理由がここにはある！

幼稚園のKさんとの交流後、「自分たちもシカの命をつなぐために何かしたい。」と、日記に書いていた児童が数人いた。児童と一緒にどんなことが命をつなぐことになるかを考えると、「毛皮作り」「アクセサリー作り」が上がった。毛皮作りは人数分の材料を調達することが非常に難しく、アクセサリー作りされることになった。

まず、鹿の角を調達し、それらを切断するために図工室にあるありとあらゆる道具を使って子どもたちと試行錯誤を繰り返した。しかし、シカの角が硬さにまたたく作業が進まず、何本も糸のにぎやた折ってしまった。折ってしまった糸のにぎは、後日こっそりと補充していただいた。子どもたちと分方くられていて、クラスのAさんが、兵庫県立国見の森公園（兵庫県尼崎市）で動物の角を使った工作をした経験を教えてくれた。子どもたちは、Aさんの話を聞いて、国見の森公園でアクセサリー作りができると盛り上がっていた。

しかし、本校から国見の森公園までは、車でも1時間程度の距離があり、予算の関係でバスを借りて行くことは難しい。子どもたちにこの事を伝えると、とてもがっかりした様子を見せていた。ここで簡単にあきらめないのが、3年生のすずだ。シカの角アクセサリーを完成させるために、みんなでアイデアを考え合った。3年生が考えたアイデアは、名付けて「国見の森公園の方に千客腐来もらった作戦」だ。作戦の内容は、手紙にこれまでの活動を書いてお願いの手紙として送るというものだった。

9）おっちゃんに任じとき、なんとかしたい！（Hさん、Nさんとの交流）

子どもたちの熱意が通じ、国見の森公園からHさんとNさんを招くことができた。HさんとNさんに、学校の道具では歯が立たなかったことや図工室の道具を壊してしまったことを伝えると、「よし、任じとき。うちでなんとかする！」と、大きな万力や電動グラインダー、インパクトドライバーなど専門的な工具を持参してくださることになった（写真6）。

---

6 Hさん、Nさん（兵庫県立国見の森公園 猿猴の自然豊かな森や里山を公園にした施設（兵庫県立国見の森公園））で、環境学習、体験学習を中心としたプログラムを企画、運営する県立公園職員。
当日、1名の児童が欠席していたが、何人かが相談して、欠席児童のペンダントとキーホルダーを作る姿があった。自 í の分を作るだけでも大変な作業であったが、友だちと協力して欠席者の分を作る様子から、児童同士のつながりも育まれていることを実感できる交流であった。後日、給食を食べながら児童たちと「路線バスで乗れば、国見の森に行けたね。」という話でひとと盛り上がった。

今回の交流は、猟で捕ったシカは、肉として食べられるだけでなく、いろいろな物に形を変え、新しい命として命をつないでいることを五感で感じることができる交流であった。また、シカをより身近に感じることができる体験でもあった。

10）肉汁たっぷり、ジューシーシカ肉（Yさんとの交流）

ジビエ肉を使った調理体験には、Kさんの御陰で、シカ肉の製造販売を手がけるYさん（以下Yさん）7を紹介していただいた。Yさんとの打ち合わせで、「子どもたちにぜひ食べさせたい料理があるんです。」とローストヴェニソンなる料理を提案してくださった。コッケリカレーができたらいいなと思っていただいた私は、聞いたこともない前日の料理に少し戸惑ったもののYさん心配りをとてもありがたく感じた。また、Yさんは、シカ肉の安全な調理法などを書いたレシピも用意してくださっていた。

交流当日。児童たちはYさんが猟で捕った後に下処理されたシカ肉をツンツンしたり、鼻がくっつくほど顔を近つけて匂いを嗅いだりと、初めて見る真っ赤な生のシカ肉に大変興味をもっていた（写真7）。調理中にはシカ肉の栄養素やシカ肉の下処理の仕方について教えていただいた（写真8）。試食後、児童たちは自分の作った料理が、これまで食べたシカ肉と味も食感も違うことを不思議に感じ、Yさんを質問攻めにした。活動前、シカ肉に対してあまりいいイメージをもっていなかった児童たちは、シカ肉の調理・試食という体験を通じ、

---
7 Sさんご夫妻（興部、興部の店「でよりーす」経営）職業として夫婦で狩猟をしながら、鹿肉の製造販売を手がける興部市在住の興部。鹿肉の安定供給やジビエ料理のPR活動も進める。

165
これまでのイメージを覆す驚きの体験をすることになった。
調理体験後、クラスの S さんは、栄養職員 M 先生に「毎日給食でジビエ料理を出して。」と願っていたが、「だめー！」うまく断られていた。
当初予定していなかったが、ジビエ料理に興味のある保護者から参加希望が多数あり、一緒に調理体験をすることになった。Y さんはジビエ料理の普及活動にも熱心で、保護者の参加を歓迎されていた。

【シカ肉に対するイメージ】

<table>
<thead>
<tr>
<th>交流前</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>・けもののおいしさ、すじがあって硬い</td>
</tr>
<tr>
<td>・料理がちがってもいつもほうがの味がする</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>交流後</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>・肉汁がたっぷりでおいしくて、いいにおいだった</td>
</tr>
<tr>
<td>・食べた感じは、やわらかくてとてもジューシー</td>
</tr>
</tbody>
</table>

1.1）子どもたちは「シカのごはさ」を語る
講師との交流での驚きや疑問など児童たちの心を動かした体験をふりかえるために、クラスで意見交流をする場をもった。児童はこれまでの体験をふり返る中で、その気づきを「シカのごはさ」「シカの命」というテーマで語り合った。児童は、講師の方々との交流を通して、シカのもう一つ魅力を自分たちなりに感じたようであった。

【シカのごはさはどんなところだろう】

<p>| |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>・肉…低脂肪、低カロリー、鉄分が多い、栄養満点</td>
</tr>
<tr>
<td>やわらかい、肉汁いっぱいい、おいしい</td>
</tr>
<tr>
<td>・毛皮…敷物やマフラーになる</td>
</tr>
<tr>
<td>・角…アクセサリー、ハンガーラックになる</td>
</tr>
</tbody>
</table>

1.2）子どもたちは「シカの命」も語る
シカの命や肉について語ろう過程で「猟でシカを捕らえこと親戚や反対」というテーマ

---

8 当地域の家庭で作られるシカ肉料理は、致病物質を含まずに、しかも味付けをすることが多い。
マが生まれ、「自分がオカだったらと･･･。」とオカになってみたり、「僕の家のオカはオカに･･･。」と自分の生活を照らし合わせてみたり、オカの命と実生活での困り感の間に立ち、本音をぶつかった。大人による価値観の押しつけも、ゴールも答えもない語らいでは、これまでの経験に裏打ちされたリアルティーのある声を聞くことができた。「どちらかには決められん。どちらかに決めるかんの？」「オカの命は必要なんやし、その後どうするか大しちゃ KG さんが言った。」という児童の言葉が自然した話し合いを収束させた。

我々は児童に意見を求める際、意図せずにどう、自分の想定する範囲内の答えや大人の都合に合わせた発言を求めてしまうきらいにあります。また、児童自身も教師の思いを見抜き、大人に寄せて発言する場面も多く見られる。児童がこれほどまでに本音で語ることができたのは、大人の思い描く答えへの誘導やあらかじめ設定されたゴールがなかったことも理由の一つとして考えられる。

【オカを絞るのに賛成の反対】

一賛成派一
- 煙や田んぼが荒らされると野菜が食べられない
- 殺さないと数がどんどん増えていく

一反対派一
- 自分がオカだったらと考えると賛成できない
- オカを絞るのは人間の勝手だと思う

どちらとも言えない
- オカの命は大事にしたいけど、自分たちの生活も大事だから、どうしたらいいかわかりない。その後どうするか大しちゃ。

１３）オカの命をつなぎたい

KG さん「オカの命をつなぐ」という言葉を手がかりに、児童から上がった「オカの命を大事にしたい」「その後どうするか大しちゃ。」という考えをより具体化する方法について話し合った。ここでは、KG さんの言葉を児童たちに投げかけた。「どうやったらジピ
エのいのちはつながっていくんだろう。」という問いに、児童はかなり長い時間沈黙を続けた。ほりほりつぶやきが聞こえ、次第に一人ひとりが自分の思いを語り始めた。

みんなの思いは、「自分たちはいろいろな体験や調査をしてジビエのすごさを知っていながら、ジビエのすごさをみんなに伝えることができる。」「ジビエのすごさをアピールして、大事な命を最後までつないでもらいたい。」という方向に集まり、「自分たちの学んだジビエのすごさをみんな（全校児童や地域の皆さん）にPRする。」という新たな展開に動き始めた。

児童たちがPRする対象を全校児童だけでなく、地域へと広げたことは、嬉しい誤算であり、これまでの体験や交流が地域へのつながりを生んでいることを実感する場面であった。

14）ジビエPR隊結成！

子どもたちの活動はジビエ調査隊からジビエPR隊に名前を変え、地域にジビエのすごさを伝えるための活動をスタートさせた。まず、PR方法を考えたのだが、大人頃先のアイデアがたくさん出た。みんなで考えたジビエのPR方法は以下のようなであった。

【ジビエPR隊】
○PRグッズ
　のほり、ジビエ応援ソング（詞と歌詞カード）パンフレット、ポスター
○PR場所（相手）
　ふれあいタイム、千種市民局、えーがいや（全校児童や地域のみなさん）

ジビエPR隊の活動として、PRグッズ作りをスタートさせたが（写真9）、他のグループの様子を見た児童がそれぞれのPRグッズに書かれている内容がばらばらであることに気づいた。「グループごとに書くことが違っていると、ジビエのすごさがうまく伝わらず、PRしにくいのではないか」ということが話題となり、PRグッズに載せる内容やキャッチコピーをみんなで相談した。そして、これま
15) P Rグッズを持って、出発だ！

連絡役の児童数名と訪問予定先に伺い、日程や内容の相談をした。対応してくださった職員の方は、ジビエ PR 隊の活動にとっては興味をもってくださり、児童たちにいろいろ質問をされていた。そして、「ふれあいタイム」「千種市民局」「えーがいや千種」で PR 活動に臨んだ（写真 10）。千種市民局「えーがいや千種」では、パンフレットやポスター、のぼりを掲示するジビエコーナーを作っていたことになった。

16) 紙面に収まりきらない思いがここにはある

これまでの活動を「新聞や手紙を書いて、お世話になった方や他学年に見てもらう。」と話しると、児童から新聞では、これまでの活動が十分に伝わらない。という意見が出た。また、「自分の言葉で相手に直接伝えたい。」という考えも出された。数名の児童から「発表会を開いているいろんな人に見てもらいたい。」という意見も上がった。私は、「発表会はグッドアイデア！」と感じた反面、想定外の展開に時間のとりくりが心配でもあった。その場では、答えが出せず考える時間を一日もらうことにした。児童の言う通り、これまでの心を揺さぶる体験は制限の多い新聞という枠組みの中には収まりきらないのかもしれないと感じ、児童の思いをもう一度聞くことにした。翌日には、お世話になった方と 4 年生を招待して、発表会で話をすることを決めた。

3 年生は、11 月に開催した文化祭で「ジビエ探偵団の劇」を披露したかったのだが、3・4 年生合同発表ということで、実施できなかった悔しい経験を、今回の劇化へつなげたかった。準備に使える時間や招待する方との連絡等について確認し、さっそく準備に取り掛かった。大まかな場面やセリフは、練習をしながら児童と一緒に作っていった。

「11）子どもたちは「シカのすごさ」を語る」で整理した内容

169
１７）子どもたちのこだわり

児童が製で一番こだわったのは、「シカの命（シカを猟で捕ることについてどう思うか）」であった。シカの命は、これまで児童を一番悩ませていた課題であり、「参観者の考えを開きたい」「もう一度話し合いたい」と、進行の工夫をしたり、自分の考えをまとめ直したりした。そして、これまでお世話になった講師の方や先生達、行事や体育等でいつも一緒に勉強をしている4年生を招待するために、手作りの招待状も作った。

１８）ジピエサミット2018in千種

発表会当日、児童の一人が体調不良で欠席した。しかし、私が欠席連絡を受け教室に行ったところには、全員の児童が集まり、役割分担をやり直し、欠席者のセリフの練習をしていた。児童たちのこの動きにはとても驚いた。

児童たちは、これまでジピエ探偵団の活動で、主体者として目の前で起こる事象に関わってきた。そして、時には立ち止まり、時には後戻りしながら自分たち独自の道を切り開いてきた。その過程で、何度も自己決定を繰り返すことが、このような自発的な行動に結びついたのではないだろうか。幸いにも、欠席連絡をした児童は午後から登校し、発表会には間に合ったのだ…
発表会は、4年生をはじめたくさんの方に参観していただくことができました（写真11）。サミットの最後は、ジビエ応援ソングを参加者の皆さんと一緒に歌った（写真12,13）。

写真13ジビエ応援ソングの歌詞

19）創造的な学びと数値化！？

児童たちは講師との交流に心を大きく揺らした。また、地域へ出かけ自分の言葉でジビエのすごさを語った。学校という枠組みを飛び出す地域とつながり、その場その場にいた人たち思いを共有した。そして、これまでの交流や体験、自分のごんばりを作文に書いて帰り返った。

年を追うごとに顕著になっている学力重視の教育政策は、子どもたちの学ぶ環境に大きな影響を及ぼしている。学校現場においても OECD 生徒の学習活動度調査や2007年度以降の全国学力・学習状況調査の結果に振り回され、子どもたちの学びの全てを数値化されたもので推し量ろうとする傾向がみられる。しかし、数値化できるのは、我々が日々児童たちと営んでいる学びのほんの一部にすぎず、本実践のような児童たちの協働的で創造的な学びや地域の思いをつなぐ営みは決して数値化して評価できるものではない。
２０）子どもたちの思いが地域を動かす

発表会を終えた数日後、地域のFさんからこのような手紙をいただいた。「この活動は大人が引き継いでやっていかないといけない。子どもたちの取り組みは、歴史対策が千種の名物に変わっていくひとつのきっかけになる。町内の施設でジビエ料理をお客さんに出していくことも考えている。」

児童と地域をつなぎたいという思いをもって進めたこの活動が子どもたちだけでなく地域住民へも波及し、地域を動かすきっかけになったことは、思いもよらないことである。シカやノズラなどの歴史対策は、地域にとって頭を抱える課題である。この課題をプラスに転換しようとする児童の目線は、歴史対策に新しい視点をもたらすのではないだろうか。

おわりに ～子どもたちの明日を考える～

子どもたちと一緒に飛び込んだ地域は、一人ひとりの知的好奇心を想像以上に刺激した。ジビエ探検団の活動をスタートさせると、子どもたちの「なぜ？どうして？」が溢れ出した。そして、子どもたちの学びに対する大きなエネルギーと地域の応援が重なり、ジビエ探検団の活動は次から次へ流れるようにつながっていった。「3年生、いつも楽しそうですね。」他学年の先生が声をかけてくれるようになった。「3年生、シカ肉料理したんやろ、おいしかった？」「ジビエ応援ソング歌えるようになったで。」他学年の子どもたちも興味津々に3年生の活動を見つめていた。保護者の SNS には、ジビエ探検団のことがたびたび登場していると聞く。

子どもたちはジビエで地域とつながり、子どもたち団もジビエでさらにつながりを深めた。職員室でもジビエは共通の話題になった。Yさんは「ジビエサミット2018in千種小」で子どもたちの発表を観覧された心境を手紙で伝えてくださった。子どもたちの学びを核に、人と人との自然な形でつながっていった。

子どもたちの学びが、学校・地域・家庭を結びつけるかすぎたいと、地域のエネルギーとなった。地域を元気にし、人と人を結びつける一私たちの目前にいる子ども

---

10 手紙をくださったFさんは、たかのす東小学校（旧千種東小）を管理されている方で、千種町の地域おこしの核となっている公の役である。Fさんは今回の活動の講師ではなく、講師で学校に来てくださった方から話を聞き、上記のようなコメントをくださった。
たちは、そんな可能性を秘めている。

余談であるが、児童たちは3学期、再びツチノコについて調査をしている。実は、数人の児童が2億円をあきらめきれず地道に調査活動を進めていたのだ。冬休み明け、その事をみんなに発表し3学期の総合的な学習の時間は、「帰ってきたツチノコ探偵団」として活動することになった。
【付表1】

<table>
<thead>
<tr>
<th>時期</th>
<th>学習活動内容</th>
<th>地域人材等</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>9月上旬</td>
<td>千種の森に住む生き物をテーマにイメージマップを作る&lt;br&gt;千種の森に住む生き物についてくわしく知る（GT1）&lt;br&gt;Iさんとの交流で学んだことをふり返る</td>
<td>地域おこし協力隊&lt;br&gt;Iさん</td>
</tr>
<tr>
<td>9月中旬</td>
<td>ジビエのすごさを見つけるための計画を立てる</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9月下旬</td>
<td>ジビエの生態や飼の仕方を教えてもらう（GT2）&lt;br&gt;ジビエの角でアクセサリーを作る（GT3,4）</td>
<td>師匠Kさん&lt;br&gt;同窓の森公園職員&lt;br&gt;Hさん、Nさん</td>
</tr>
<tr>
<td>10月上旬</td>
<td>ジビエ料理を作って、試食する（GT5）</td>
<td>師匠の店経営&lt;br&gt;Yさん</td>
</tr>
<tr>
<td>10月中旬</td>
<td>ジビエのすごさについて話し合う&lt;br&gt;ジビエの使いこなしについて話し合う</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月上旬</td>
<td>ジビエのすごさを絵に、どう伝えるか考える&lt;br&gt;ジビエのすごさをPRグッズにまとめる&lt;br&gt;校内や地域でPR活動をして、ジビエのすごさを広める</td>
<td>ふれあい集会&lt;br&gt;千種市民局&lt;br&gt;えーがいや千種</td>
</tr>
<tr>
<td>12月中旬</td>
<td>これまでの学習をふり返り、学んだこと劇にまとめる&lt;br&gt;地域の方や4年生を招待し、学んだことを発表する&lt;br&gt;学習での自分のがんばりをふり返る</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（のざき だいすけ　兵庫県公立小学校教員）